

トピックス

津山城宮川門周辺の
古写真見つける

博物館の看板をリニューアルしました!

小学生の博物館見学・体験講座

津山東中学校チャレンジワーク

研究ノート

「江戸一目図屏風」の太陽 尾島 治

資料紹介

元禄美作国切絵図 小島 徹

お知らせ

販売中です!
江戸一目図の関連グッズ

今後の行事予定

津博

TSUHAKU

No.73 津山郷土博物館だより「つく」

2012.07

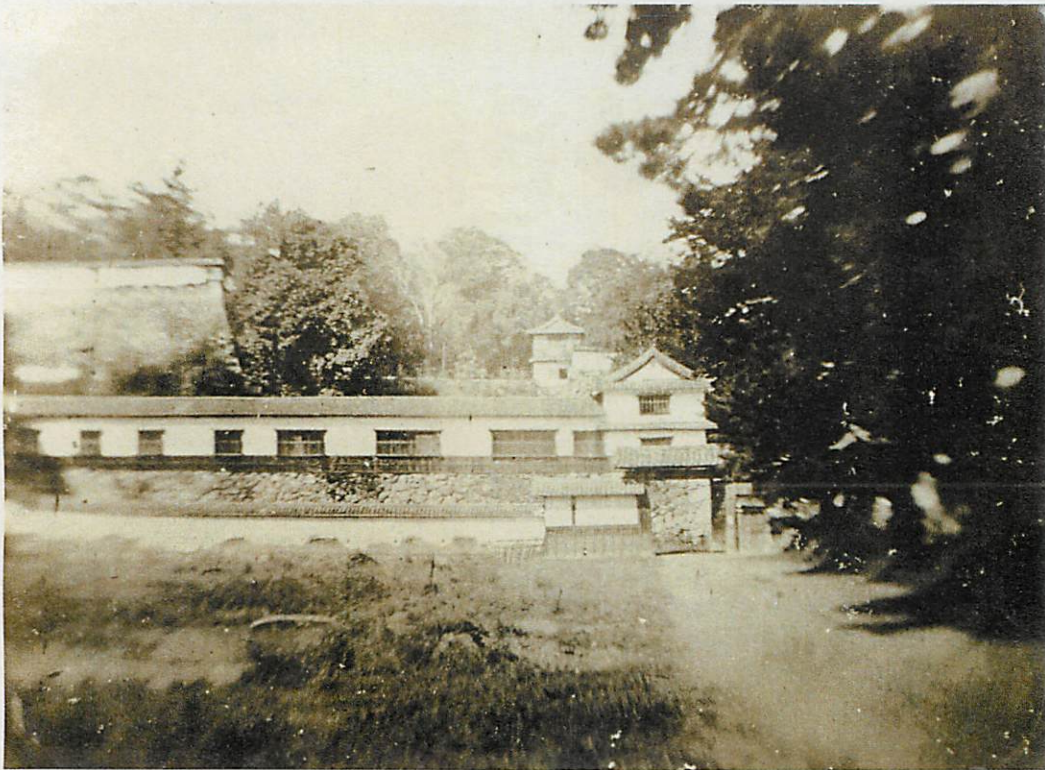


津山郷土博物館

Tsuyama City Museum



津山城宮川門周辺の 古写真見つかると



古写真A：今回見つけた写真

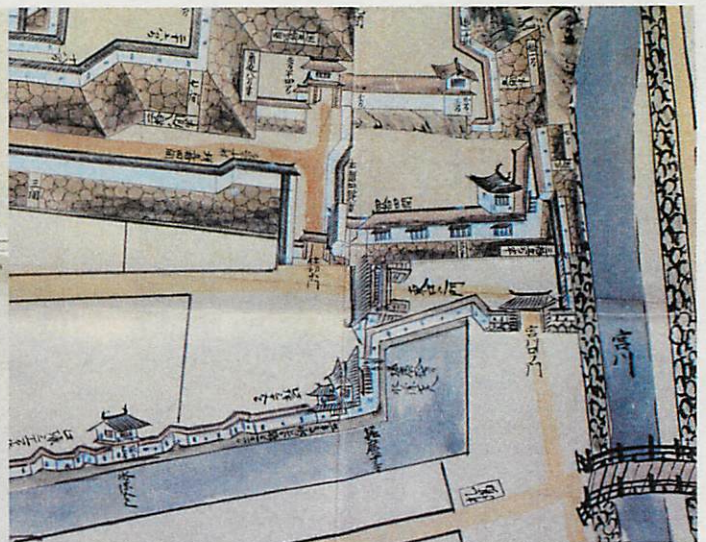
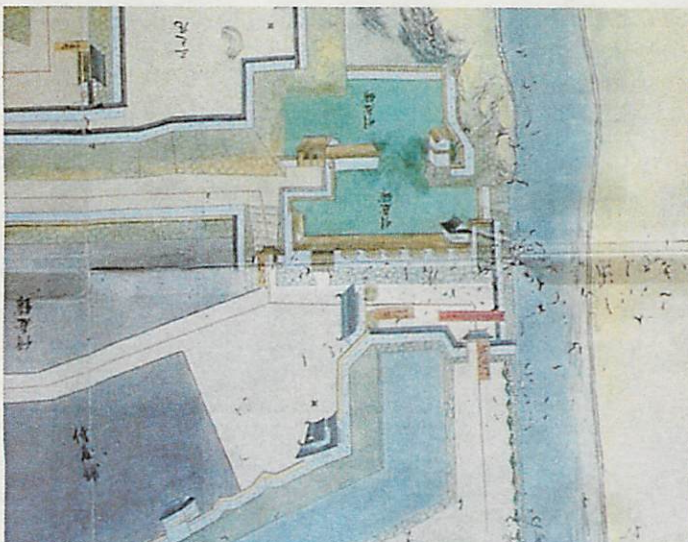
今まで未発表と思われる津山城の古写真が、このたび新たに見つかりました（古写真A）。

この古写真は、岡山市在住の渡辺泰多さんが所蔵しているもので、6月初めに、ご本人が当館にお知らせくださいました。津山城南東部の宮川門周辺の風景が、タテ約11cm×ヨコ約15cmの印画紙に焼き付けられたものです。今までに確認されている津山城の古写真とは、構図が異なります。

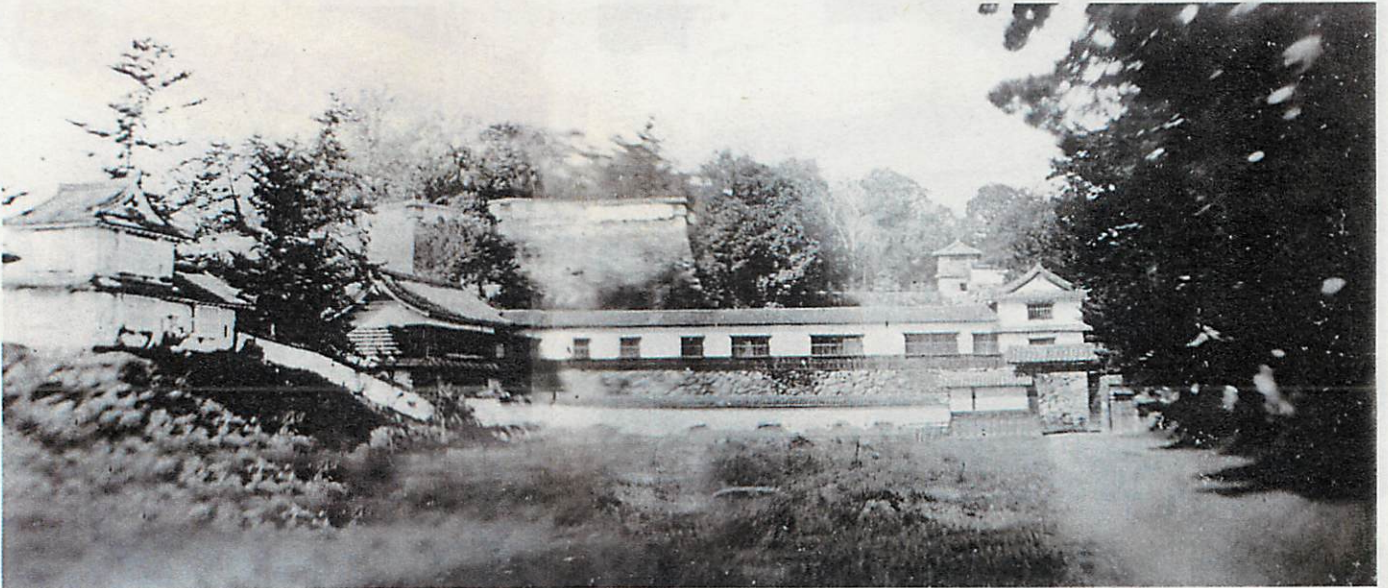
撮影された場所は、現在の旧城南医院の周辺です。城郭の最も外側に当たり、風景は一変しています。画面中央に横に細長く写っている石垣は現存し、ちょうど昨年から今年3月にかけて修理工事が実施されています。

渡辺さんによると、この写真を含む津山城の古写真7点（他の6点はいずれも既に確認済みのもの）が、昨年、九州の古書店で売り出されていたのを知って購入したということです。

今回見つけた写真と近い構図の



絵図に描かれた宮川門の周辺（左：津山御城絵図 右：津山絵図）

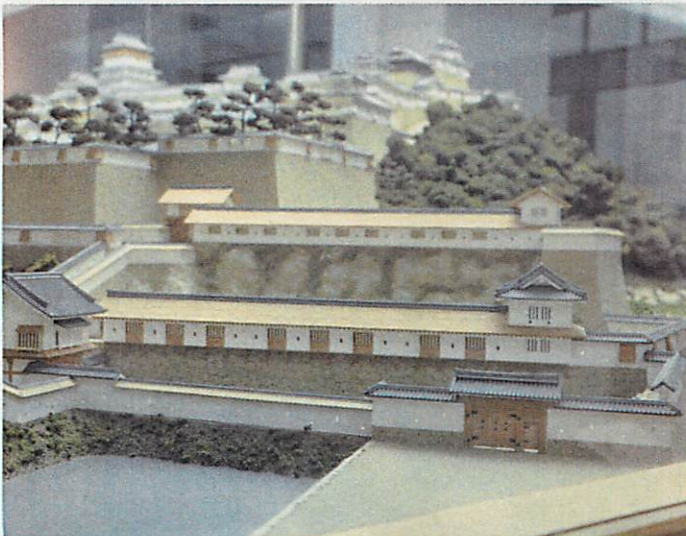


宮川周辺門の2枚の古写真（AとB）を合成したもの

写真（古写真B）は、以前から確認されてきました。この2枚の写真がつながらないかと考えた渡辺さんは、近所の写真館に合成を依頼し、できあがった写真を1枚当館に進呈くださいました。違和感のない仕上がりに驚かされるとともに、画面が広がることで迫力と臨場感が倍増したように感じられます。違和感なくつながることから、この2枚は同じ時に同じカメラで、向きだけ変えて撮影されたものと思われまます。

津山城の古写真に関しては、築城400年に先行して平成12～14年に実施された資料調査の際に10数点が確認され、『津山城 資料編』『同II』に収録されています。その時点で可能な限り手を尽くして探していますので、別の新たな古写真の発見は困難ではないかと思われていました。

それだけに、今回の発見は関係者を驚かせるもので、まだどこかで眠っているかもしれない資料の存在を期待させる、うれしいニュースです。そもそも、残っている古写真は建物を遠方から写したものでばかりで、門についても宮川門のみですが、大手筋の京橋門を避けて宮川門しか撮らなかつたかと考えるのはあまりにも不自然です。今回の発見をきっかけに、津山城に関する新たな資料が発見され、調査研究がさらに進展することを願ってやみません。



当館で常設展示している津山城復元模型における宮川門の周辺



古写真B：以前から確認されていたもの。古写真Aの左側が写る



博物館の看板を リニューアルしました!

6月下旬、当館南の道路に面して設置されていた看板を新調しました。以前の看板は昭和63年のオープン時に作成したのですが、数度の料金改定による訂正箇所が目立ち、また年数の経過によつてすけて薄汚れていたため、新しい看板に取り替えました。江戸一目図と津山城復元模型をデザインにあしらい、装いも新しくなっています。ご来館の際、この看板にも目を向けてみてください。

津山東中学校 チャレンジワーク

Challenge
Work

職場体験活動「地域に学ぶ つやまっ子デビュー14」として6月13日から15日の3日間、津山東中学校2年生1人を受け入れました。資料発送の準備、クリアファイルの袋詰め、特別展に向けての絵図撮影、和綴本の修復など、事務作業から資料に直接ふれる作業まで、さまざまな業務を体験してもらいました。なかでもガラスケース内での展示替えが一番印象に残ったとのことで、これをきっかけに博物館の展示により一層興味をもってもらえたのではないのでしょうか。

【生徒の感想文】

博物館の仕事をやって来館者の方のご案内をしたり、展示品の入れ替えとか、そんな仕事なのかなあと、最初は思っていたんですけど、それ以外にも様々な仕事があり、とてもびっくりしました。また、体験の中で、普段は絶対に入る事のできない場所やさわる事のできない物にさわったりなど、とても貴重な体験になりました。今回の体験をこれから将来、働いたりする中で、いかしていきたいと思います。(津山東中学校2年 野上 知恵)



小学生の 博物館見学・体験講座

Visit Experience
The Museum

5月に南小学校、院庄小学校、6月には勝加茂小学校、成名小学校の6年生が、当館に見学にきました。

当館では、学校の希望があれば、館内の見学・案内とあわせて、小学生に実物の資料をさわって体験していただく講座も同時に行っています。

今回は、火縄銃に触れたり、火起こしを体験してもらったりしました。火縄銃の実際の重さにとまどう生徒や、火を起こそうと一生懸命に心棒を回す生徒がいたりして、なかなかできない体験を楽しんでいるようでした。



「江戸一目図屏風」の太陽

尾島 治

津山郷土博物館所蔵の「江戸一目図屏風」(図1)には、太陽が描かれている。屏風の第六扇の更に端の方で、江戸湾の出口付近に描かれる山並みの向こう側に、赤い太陽が小さく描かれている。

この太陽は、以前には、その方位が南西寄りになると考えられることから、夕日であると考えられていた。しかし、「江戸一目図屏風」

に先行して制作され、その関連作品と見なされている「江戸名所之絵」(図2)に書き込まれた「カツサ」(図3)の文字が指摘されてからは、太陽の位置が南東寄りになる房総半島の方角であるなら、太陽は朝日だろうと考えられるようになった。

さて、本当の蕙斎の意図はどちらだったのか。それを、絵の内容から確定す

ることは難しいだろう。しかし、「江戸名所之絵」と「江戸一目図屏風」を比較して、もう少し考えるべき要素がある。

それは、太陽の位置に関する山並みと、連なっている山々で構成されている。「江戸名所之絵」では、太陽は



図1 江戸一目図屏風



図2 江戸名所之絵



図3 江戸名所之絵部分



図4 江戸一目図屏風部分

高い山の右側にやや低く描かれている。そして、帆船は山並みの右方向からやって来ている(図3)。「江戸一目図屏風」では、太陽は高い山の左側にやや高く描かれ、帆船は、山並みの左方向から入ってくる(図4)。

これらの違いには、何か意味があるのではないだろうか。しかし、その全てを明らかにすることはできないので、ここでは、特に帆船の動きに注目したい。「江戸名所之絵」で、「カツサ」の注記をそのままに理解して、山並みが房総半島だとすれば、帆船は、江戸湾に入ってくるために、

山並みの右方向から入ってきていることになり、実際の地理的な位置関係と合致する。一方の「江戸一目図屏風」では、帆船は、山並みの左方向から入ってきており、この表現が地理的な位置関係と合致しているとすれば、山並みは三浦半島ということになる。そうすると、「江戸名所之絵」の太陽は東方向にある朝日であり、「江戸一目図屏風」の太陽は西方向に描かれる夕日ということになるのだが、さて、どうなのだろうか。これら二種類の江戸景観図における蕙斎の絵画表現が、そこまで意識していたのかどうかは不明であるし、「江戸名所之絵」と「江戸一目図屏風」の表現に関する原則が一致しているとの保証もない以上、確定的なことは言えないが、緻密な表現を貫いている蕙斎の作品としては、この表現の変化は、意味のない偶然の変化とは考えにくい。しかし、そうだとすれば、両作品における太陽の位置や高さの変更についても十分に考察すべきであり、速断は避けたい。ただ、「江戸名所之絵」と「江戸一目図屏風」に関しては、まだ、解明すべき多くの謎が秘められていると言えよう。

元禄美作国切絵図

小島 徹

▽国絵図とは？

江戸幕府は、諸大名に命じて国ごとの地図である国絵図を作成して江戸城の紅葉山文庫に収納し、年数を経て古くならんと改訂を重ねた。大規模なものは四回、慶長・正保・元禄・天保期に実施されたことが知られている。

その仕様は美しく壮大で、良質の和紙を貼り合せた用紙に極彩色で描かれる。正保度以降は二里を六寸とする縮尺（二万二千六百分の一）で統一され、山川や湖、海や島などの自然地形はもちろん、国・郡の境界や城郭・村・道路・一里塚まで表示してある。各村の位置は村名を記した楕円形の枠で示し、その枠内に石高が併記され、墨紙と呼ばれる余白部分に石高・村数を郡ごとに集計した目録が記載されており、国絵図作成事業の目的の一つに、日本全国の年貢収納高を詳細かつ正確に把握することがあったのは間違いない。

幕府に収納された国絵図原本のうち、現存するのは、元禄度の五か国及び琉球のものと、天保度の全国のもので、国立公文書館に保存されている。また、全国各地でも、作成実務を担当した大名家等に保管された控えや写しの絵図の残存例がいくつか確認されている。

▽美作の国絵図

美作国に関しては、正保度の控図と思われるもの他に、国絵図事業に直接関連する国絵図の存在は、従来知られていなかった。しかし、当館で近年収集した資料の中に、元禄美作国絵図の写しが見つかった。それが、7ページの写真の絵図である。

この絵図は、美作国全体を六分割で厚手の和紙に描いた巨大なものである。道路の里塚の間隔から二里六寸の縮尺であるとわかるほか、彩色が淡いこと以外は先述した正保度以降の国絵図の仕様にはほぼ準じた描写となっている。南北方向で六枚に分割され、一枚は幅六二cm・長さ二八五cmで、写真のようにつなげると、横幅が三七二cmにも及ぶ。現存する天保美作国絵図原本の大きさが三八九cm×二七二cmであるので、ほぼ同じ大きさだと確認できる。

墨紙目録の末尾には「元禄十三庚辰年（一七〇〇）十二月 松平備前守」と記される。松平備前守とは、津山藩主松平家初代・長矩（後の越後守宣富）のことである。元禄十三年の津山藩「江戸日記」によると、十二月十二日に絵図二枚・郷帳二冊を箱二つに入れて幕府評定所に上納したとあることから、本図は元禄度の美作国絵図の控えか写しであることがわかる。

▽天保度の改訂をめぐる

なお、天保度の国絵図改訂では、諸大名が作成して献上するという従来の手順が改められた。まず幕府から元禄国絵図の写しが諸大名に交付され、それに元禄以降の変動箇所を懸紙によって修正して提出させ、その修正図に基づいて幕府勘定所で清書するという方法が取られている。

その際、幕府から交付された元禄絵図の写しは、薄紙に淡彩で写して細長く何等分かに裁断した切絵図の形状であった。改訂の指示が下った天保六年（一八三五）十二月二十三日の津山藩「江戸日記」には、交付された絵図が美作一國を七巻に分割したものであることが記されているし、津山藩が懸紙修正を終えて幕府勘定所に提出した天保八年十月十八日の「同日記」から、提出絵図も七巻だったことがわかる。

実は、本図の他に、これと共に伝来した美作一國を七分割した薄紙・淡彩の切絵図二種類が存在する。いずれも経緯や概要のわかる裏書または包・袋の類は見当たらないが、描かれている内容を検討すると、七分割絵図のうちの一巻（以下A図とする）は、いわゆる懸紙による修正が各所にみられるのに対し、もう一巻（以下B図とする）はそのような修正が全くなく、A図の修正前の様子が描かれ、かつ文字表記が一切ない。本稿で詳しく検討する余裕はないが、A図が天保度改訂時の提出絵図の下書または控え、B図が天保度改訂のために幕府から交付された絵図の写しではなからうか。



元禄美作国切絵図 (個人蔵)

▼ 本図の作成経緯

以上を踏まえて、改めて本図を見てみよう。天保度に幕府から交付され、また修正・提出した国絵図が七分割であるから、六分割の本図は、天保度の改訂作業に直接の関わりはないのかもしれない。ただ、幕府から交付された絵図自体も元禄絵図の写しなので、作業開始に先立って内容に相違がないか確認に使われた可能性はあるだろう。

一つ疑問が残るのは、本図の形状である。仮に、元禄度の改訂時に作成されたものとして、淡彩とはいえ厚手の紙でこれほどきれいに作られた絵図を、一枚につなげずに保管したのはなぜか？元禄度の改訂では、清書済みの完成形を献上したのだから、普通に考えれば控えも完成形同様に一枚につないで保管しそうなものである。想像をたくましくすれば、あるいは将来のさらなる改訂を見越し、作業の利便性を考慮して、あえてつながなかったのだろうか。元禄の美作国絵図原本が現存しないため、真相の解明は難しいが、いずれにせよ美作の国絵図作成・改訂作業について研究する上で欠かせない貴重な絵図である。

特別展のごあんない

「江戸時代の地図づくり」

— 国絵図作成事業と津山藩 —

会期 平成24年10月6日(土)～11月18日(日)

内容 本稿で紹介した各種の美作国絵図のほか、

天保度改訂時に作成された村絵図など、関連する諸資料をあわせて展示します。

どうぞご期待ください。

販売中です！ 江戸一目図の関連グッズ

東京スカイツリーの開業にともなって注目度が高まっている江戸一目図屏風について、次のとおり関連書籍やグッズを販売しています。ご希望の方は、当館までお問い合わせください。

書籍

『江戸一目図を歩く』

— 鉄形蕙斎の江戸名所めぐり —

1,000円

グッズ

クリアファイル
(A4サイズ)

200円



津山郷土博物館 今後の行事予定

●夏休み子供歴史教室

- 「弥生土器をつくろう」 7月25日(水)・8月16日(木) 全2回
- 「カルメ焼きをつくろう」 7月27日(金)
- 「勾玉をつくろう」 7月31日(火)・8月1日(水)
- 「トンボ玉をつくろう」 8月7日(火)・8月8日(水)

小学生を対象として、体験学習できる教室を夏休みに開催します。

●文化財めぐり(友の会) 9月22日(土)

日程が近づきましたら、友の会会員の皆さまにご案内します。

●特別展「江戸時代の地図づくり—国絵図作成事業と津山藩—」

【会期】10月6日(土)～11月18日(日) 【会場】当館3階展示室
詳細は、7ページのとおりです。ご期待ください！



博物館だより「つはく」
No.73 平成24年7月1日

津博
TSUYAMA

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

【印刷】有限会社 弘文社

入館のご案内

- 【開館時間】午前9:00～午後5:00
- 【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日
年末年始(12月27日～1月4日)・その他
- 【入館料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)
高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。